

児童・青少年の美術活動を支える民間事業・地域施設の日独比較

梨本 加菜（児童学科・教授）・山成 美穂（短期大学部初等教育学科・准教授）

1. 本研究の目的・2022年度の状況について

子どもが生涯にわたり美術や表現活動に親しむ素地を育む上で、学校教育だけではなく学校外における専門教育施設の実践もまた、大切なものである。人生に対して主体的に関わり意欲的に生きる力や自己肯定感の育成、美意識を培うと同時に社会性を養うと考える。

2021年度より3年間にわたる本研究では、そのような有益な教育実践の実情が未明であることに着眼し、子どもの美術活動を支える地域の民間事業や施設の基礎研究とアンケート調査及び訪問調査による実態把握を試みる。2022年度の研究は、文化的な青少年育成として先進的なドイツの青少年学校へのアンケート調査と、昨年度のアンケート調査にご協力いただいた日本の教育施設の訪問調査を行った。本報告書は、1、2、3（1）、4を山成が、3（2）（3）を梨本が執筆した。

2. アンケート調査の中間報告：ドイツにおける「児童・青少年の美術活動」

（1）調査方法・結果の概要

学校外における文化・芸術教育のための施設としての特徴をもつドイツの青少年芸術学校から下記の5つの施設をアンケート調査の対象とした〔表1〕。青少年芸術学校の歴史が最も長く、ドイツ全土の青少年芸術学校連盟の本拠地でもあるノ르트ラインヴェストファーレン州にある3つの青少年芸術学校と、開設当初から教師が半官半民として働き、学校との連携が密接な形で運営されるベルリンモデルが実施されている3つの青少年芸術学校に調査協力を依頼し実施した。

表1 アンケート調査を実施した施設

施設の名称	施設の所在地
クレアティブハウス（JKS Kreativ-Haus）	ノ르트ラインヴェストファーレン州（NRW）／ミュンスター
ローデンキルヘン青少年芸術学校（JKS Rodenkirchen）	ノ르트ラインヴェストファーレン州（NRW）／ケルン
ブライベルガーファブリック（JKS Bleiberger Fabrik）	ノ르트ラインヴェストファーレン州（NRW）／アーヘン
シャルロッテンブルグ・ビルマースドルフ青少年芸術学校（JKS Charlottenburg-Wilmersdorf）	ベルリン州（BER）／シャルロッテンブルグ
フリックスベルグ青少年芸術学校（JKS FRI-X BERG）	ベルリン州（BER）／フリードリヒスハイン・クロイツベルグ

以下、本報告書では各施設の所在地と施設名の頭文字から、クレアティブハウスを「ミュンスター K」、ローデンキルヘン青少年芸術学校を「ケルン R」、ブライベルガーファブリックを「アーヘン B」、シャルロッテンブルグ・ビルマースドルフ青少年芸術学校を「ベルリン C」、フリックスベルグ青少年芸術学校を「ベルリン F」と記載する。

(2) 基本情報：事業・施設の開設年、指導者のプロフィール、教室の概要

(a) 開設年 [設問 3]

ノルトラインウェストファーレン州のミュンスター K は1978年、ケルン R は1989年、アーヘン B は1995年に開設、ベルリン州のベルリン C は2011年、ベルリン F は2018年に開設した。そのうち、ミュンスター K とアーヘン B には、青少年芸術学校の他に生涯学習施設として成人対象の芸術学校が同じ施設内に併設されており、それぞれ1977年、1965年に青少年芸術学校よりも先に開設された。また、ベルリン F は開設の数年前から、その前身となる児童・青少年の芸術コースが常設の建物を所有しない形で近隣の地区に分散していたが、2018年にそれらがひとつの青少年芸術学校に統合されて開設された。

(b) 指導者（代表者等）のプロフィール [設問 2、12]

5つの青少年芸術学校校長は下記の通り [表 2]、大学にて美術または美術教育学を専攻していることがわかった。また、青少年芸術学校における指導者は、「美術の専門的な学位と教育学的な資格を所有していることが望ましく、（どちらかひとつの場合もある。）既に子ども達に対する授業経験があることが必要」とされている。アーヘン B では、それ以外に、「児童福祉に関する研修を受けていること」と、「児童・青少年保護に関連する全ての前科の有無や内容が記載されている警察証明書の提出」が原則として定められている。

表 2 5つの青少年芸術学校校長の専門領域

ミュンスター K	教育家。大学の専攻は、歴史と美術教育学。
ケルン R	アーティスト。大学の専攻は、アート、デザイン、写真。
アーヘン B	マネジメント担当。大学の専攻はコミュニケーション・マルチメディアデザイン。
ベルリン C	芸術教育家。大学の専攻は、ファインアートと美術教育学。
ベルリン F	アーティスト。大学の専攻は、ファインアートと美術教育学。

(c) 教室・事業の概要 (設問 5、6、7)

各施設の概要は、下記 [表 3] の通りである。扱われる表現分野は、概ね類似した内容となっており、全ての施設が学校と連携したアートプログラムを提供している。

学校と連携したアートプログラムの実施方法は、ノルトラインウェストファーレン州の3つは、青少年芸術学校から学校へ講師を派遣する出張型の授業を実施しており、ベルリン州の2つは学校から引率教師と生徒が青少年芸術学校へ授業を受けに来ているという違いが見られた。また学校との連携の他に、国際交流にも力を入れている特色があることがわかった。交流している国々は、隣接するヨーロッパ諸国を中心に、中国・韓国・日本などのアジア諸国も含まれており難民の受け入れも積極的に行っている。青少年芸術学校利用者の対象年齢は、概ね幼児期からのスタートとなっているが、年齢の上限については18歳までとする施設と30歳までとする施設がありバラツキが見られた。

表3 5つの青少年芸術学校の概要

	ミュンスター K	ケルン R	アーヘン B	ベルリン C	ベルリン F
扱われる表現分野	視覚芸術、演劇、ダンス、サーカス、アクロバット、音楽等（視覚芸術の内容については記載無し）	視覚芸術（写真、映像、陶芸、版画、彫刻、アニメ、コミック）、演劇、パフォーマンス、劇場公演等	視覚芸術、演劇、ダンス、サーカス、アクロバット、音楽等（視覚芸術の内容については記載無し）	視覚芸術（写真、映像、陶芸、版画、彫刻、ファッション、クラフト、アニメ、コミック等）、パフォーマンス等	視覚芸術（写真、映像、陶芸、版画、彫刻、アニメ、コミック）、演劇、パフォーマンス、劇場公演等
常設の教室・施設	音楽室2、大ダンスホール、スタジオ2、劇場ステージ、多目的室3、アトリエ1、その他	1000㎡の庭、スタジオホール複数、メディア作業専門室、彫刻工房等	各表現分野の専門室、多目的スタジオが複数、劇場ステージ有り	各表現分野の専門室、多目的スタジオが複数	多目的スタジオ4（メディアラボ、スタジオ、ワークショップ）、広い屋外スペース
学校への出張授業	有り、放課後	有り	有り、放課後	施設実施の学校向けプロジェクト有り	施設実施の学校向けプロジェクト有り
ホリデープロジェクト	有り、週間単位	有り	有り	有り	有り
展覧会、発表公演など	有り	有り	有り	有り	有り
対象年齢、対象者数	主に3～18歳。参加人数/週1100名（施設）。参加人数/週500名（学校）	主に5～21歳。参加人数/週、1000名（施設）	主に4～27歳。週の参加人数不明。	主に5～20歳。参加人数/週、250名（施設）	主に5～30歳。参加人数/週、340名（施設）
その他	国際交流	国際交流	地域開発の取り組み、地域や他組織との連携、国際交流	公共空間における展示活動、美術館、宮殿などとの連携、国際交流	課外活動、美術館との連携、教員や教育者のためのコース実施、国際交流

（3）活動の目的・教育理念について（設問4）

各青少年芸術学校の教育目的については、アンケート回答の要点を下記の〔表4〕にまとめた。活動の概要においては類似点の多かった各施設だが、その活動の目的・教育理念については、内容に関する記述において表現の違いが多く見られた。そこに各施設の特色が伺えるが、全体的な共通点として、子ども達の主体性・能動性・創造性の尊重が根幹に据えられていると考えられる。

表4 5つの青少年芸術学校の教育目的のまとめ

ミュンスター K	<ul style="list-style-type: none"> ・中心は子ども：国連の子ども権利条約第31条を遵守し、「積極的に知覚し、創造し、自己管理し、社会的存在である『子ども』」に焦点を当て、子どもを主役にして援助する。 ・生きるための術、学ぶの目標を習得する：子ども達が探索的かつ創造的に世界と関わり、問題解決方法を編み出す援助をする。人生の目的は単なる生活保護ではなく自分の人生を価値あるものに形づくることだと経験させる。 ・ひとつ屋根の下で全ての芸術を：子ども達や若者が包括的にアートの世界に親しめること。
ケルン R	<ul style="list-style-type: none"> ・自主的、能動的に取り組み、自分なりの表現方法を見いだすことができるようになること。 ・芸術や文化のプロセスを理解し、洗練された洞察力を身につけること。 ・活動を通じて自分の生活空間が文化的なコミュニケーションの場として促進されること。
アーヘン B	<ul style="list-style-type: none"> ・クリエイティブな場を提供すること。子ども達に伴走すること。共に芸術と文化を創ること。共に社会との接点を成長させること。家庭のような存在であること。一緒に学ぶこと。個性と全体性を尊重すること。伝統と歴史を大切にすること。

ベルリン C	文化教育で子ども達の個性を伸ばす。芸術分野での特殊技能を伸ばす。子ども達や若者とあらゆる分野のアーティストとの出会いの場になる。都市における創造的な活動の実施、学校（小・中・高）との連携授業の実施。放課後の余暇や休暇期間のアート活動の促進。アート活動の発表。
ベルリン F	芸術文化分野で活動するパートナーと共に子どもや若者の遊び心と創造性を持って好奇心を刺激し、彼らにもっと知りたいと思わせる生き生きとしたアートの世界を提供する。アートプログラムの学際性を重視し、異文化間の協力、地域と地域を超えた協力関係によって活動する。

（４）学校教育との連携について（設問12）

（２）（ｃ）に記載したように５つの青少年芸術学校は、学校と連携したアートプログラムを実施している。学校外教育施設としての学校との関わり方については、各施設により特色が見られる〔表５〕。ノルトラインウェストファーレン州の３つは、プログラム内容において、公立学校のカリキュラムや指導要領の内容を特に意識しないという特色があり、ベルリンの２つは、学校の美術授業の応用・発展・補完を意識した内容に取り組んでいる。また、５つのうち２つの施設では美術系大学受験の準備コースも担っている。

表５ ５つの青少年芸術学校と学校との関わり

ミュンスター K	当施設が「市民による文化活動」として始まった歴史から、教育における独立性を重視し、専門的かつ芸術的自由を失わないという前提の上で活動し、カリキュラムやシラバスは、国の学校教育の拘束を受けない形で、学校（小・中・高）と連携した出張授業を放課後活動の枠組みとして担っている。
ケルン R	1999年から実験的な学校プロジェクトのアートファクトリーを設立して行っている。学校（小・中・高）と連携したアートコースの内容は、学校教師ではなく、当施設の経営陣がチーム協議の上で決定している。芸術文化や気候・環境問題などのトピックを重視したプログラムを実施している。
アーヘン B	当施設における通常コースに加え、学校（小・中・高）と連携したアートプログラムを実施しているが、子ども達や若者に対しては、正規の学校教育に加えて、「文化の力の証明」の場としての位置づけにあり、その立場を維持、強化、認定している。その他、大学受験に向けたポートフォリオ準備講座を開催している。
ベルリン C	<ul style="list-style-type: none"> ・当施設の教育目標は学校（小・中・高）のカリキュラムに沿ったものになるが、スタッフ・室内空間・設備環境・扱われる素材や材料、予算は、各コースの専門性によって具体的に決定し、運営チームがそれぞれの品質基準を策定する。 ・美大入試準備に関しては、各美大ごとに入試内容が異なるため、大学入試に関する共通ガイドラインは設置せず、個人の可能性を伸ばし、促進することに重点を置いている。
ベルリン F	<ul style="list-style-type: none"> ・通常コース、学校と連携したアートプログラムの両者において、学校（小・中・高）における美術の授業範囲の応用・発展拡大を担う。 ・学校教育と比較した際の少人数でのより集中的で専門的なアート実践の機会を提供する。 ・美術大学や専門学校のポートフォリオや入試のための準備コースを開催している。

（５）行政・地域組織との連携（設問８）

アンケートを実施した５つの青少年芸術学校において、自治体（市町村または区、州）、公立及び私立学校（小・中・高）、特別支援学校、美術館・博物館、図書館施設との連携、情報交換が行われていること、美術教育に関する地域組織と児童・青少年に関わる地域組織等に加盟、協力していることが明らかになった。

また、キリスト教教会や赤十字などの大規模な組織、ヨーロッパの芸術学校ネットワーク（Arts 4 all）との連携がある施設もあった。

（６）障害のある子どもに対する特別な取り組み（設問13）

各施設の参加利用条件としては、障害の有無、異なる文化的背景、難民など、どのような子どもにおいても排除することはないという回答があった。アウトリーチ活動としての文化教育として、特別支援学校の子どもたちと連携したプログラムや戦争難民へのプログラムを提供している。しかし、ケルン R では、障害についての専門的で特別な訓練を受けたサポーターと一緒に参加することが条件となっており、ベルリン F では、特別なケアが必要ない場合のみの部分的な受け入れが条件になっている。

（７）広報の方法（設問 9）

利用者の募集方法や活動内容の PR は、どの施設においても運営維持のために大変力を入れており、積極的に取り組んでいる。年 1～2 回のプログラム冊子・パンフレットの発行、チラシ・ポスターによる広告宣伝、施設紹介のウェブサイト、口コミ、SNS（Facebook, Instagram 等）の利用が、広報手段として共通している。また、ベルリンの 2 校においては、公共空間におけるパフォーマンス発表や、野外イベント、施設主催のお祭りなどが広報活動の一環として頻繁に行われている。新聞広告などによるプレスリリースにも力を入れていることがわかった。

（８）活動の維持・発展の課題について（設問15）

現在および今後の課題については、下記〔表 6〕にまとめた。全ての施設に共通する課題は、資金調達の維持であることがわかった。5 つの青少年芸術学校の運営は、保護者からの謝礼だけでなく、その大部分が行政からの助成金によって賄われている。持続的な公的資金援助の獲得を目指し、活動の公的かつ教育的な意義の証明、社会的位置付けの向上が常に必要とされている。

表 6 5 つの青少年芸術学校における現在の課題

ミュンスター K	コロナ禍の対応において、政府からの財政援助や参加者・保護者との連帯感に恵まれたにもかかわらず、施設の存続、講師陣や参加者、維持、各種支援、収入の維持が多大な努力と困難を必要とした経験から、継続中のコロナ禍対応、気候変動やヨーロッパの戦争が芸術と教育の資金調達に長期的な影響を及ぼさないようにしなくてはならない。
ケルン R	2022年5月「子どもには権利がある」という法律が施行されたことを受け、参加者へより一層の配慮をし、子ども達自身の希望や能力を引き出し、プロセス重視で彼らの発言権をより一層尊重すること。
アーヘン B	現代社会の課題（気候変動、人種差別、民主主義教育等）を活動に盛り込むこと。当該施設への持続的で堅実な資金調達。自治体の教育現場における本施設の位置づけ。
ベルリン C	事務局スタッフの常駐、アーティストへの謝礼報酬を確保することにより発展のための基盤を構築すること。SNS における広報活動には技術設備、訓練を受けたスタッフを必要とするため、その対応が課題である。
ベルリン F	財政的・空間的条件の確保。施設の成長と需要の増加。学校の枠から文化行政への転換。

3. 訪問調査の中間報告

（１）朴木こども協働アトリエ（大分県由布市）の視察訪問

9月2日、朴木こども協働アトリエを梨本と山成が訪れた。そこでは美術家が廃校を利用したアトリエを解放し、創造性の育成を通して地域の子どもたちの自立支援に取り組ん

でいる。主宰者の榎園歩希氏は、コロナ禍を契機に東京からUターンした。緑溢れる校庭がある古い木造校舎には製作用、展示用、応接用の部屋があり、廊下にはカラフルな作品が飾られていた。週1～2日だけ子どもが自由に過ごし、自分のペースで創作活動に従事し、様々な画材や素材などを用いて思いのままに製作活動に没頭できる空間が広がっていた。

榎園氏によると、アトリエの運営方法は保護者からの謝礼に頼らず、子どもたち自身の力で経済活動を実践しようと試みている。既存の形式に捉われない運営方法を模索し、「アート」のあり方を作品製作の枠を超えて子ども達に啓発していく意義について考えさせられた。ゆるやかな時間の流れと、豊かな自然に囲まれたアトリエで子どもたちの作品を鑑賞し、創作活動やインスピレーションは、物差しや時計では測れないものであり、十分な余白と余韻があってこそ生み出されるという視座が得られた。(写真 a,b)



a：朴木こども協働アトリエ外観



b：朴木こども協働アトリエ廊下

(2) 大分県立美術館 OPAM（大分県大分市）見学

同館では2021年度に中高生対象の「OPAM美術部」が開始された。中高生対象の事業は全国でも希有である上、コロナ禍にもかかわらず、2021、2022年度ともに定員20名は満席である。9月2日に梨本と山成が、朴木こども協働アトリエ主宰者の美術家・榎園歩希氏とともに訪問し、教育普及室の学芸員・井上玉光氏にお話をうかがった。

ガラス張りのアトリエと体験学習室の前には県内の土や鉱物から作る顔料や標本、道具等が満載の「教材ボックス」がある。美術館教育を重視し、建物の中央に教育普及の拠点が置かれている。訪問時は2021年度のエデュケーション事業を紹介する展示の開催中であった。年末年始はOPAM美術部の作品展示も予定される。県内に4年制の美術大学がないこともあり、ワークショップやレクチャーをとおしてアーティストや作品に出会い、さまざまな素材や技法、美術史に触れることは進路選択を含めた貴重な体験となることの示唆を得た。(写真 c)



c：大分県立美術館（OPAM）アトリエ

（３）第61回社会教育研究全国集会第15（博物館）分科会（於・福岡市美術館）参加

9月3日に社会教育推進全国協議会主催の標記の分科会に梨本が参加した。九州の4施設の報告と、海外の動向の紹介があった。直方谷尾美術館（福岡県直方市）は小・中学生（小学校3年生以上）の「子どもスタッフ」を毎年度公募し、絵画の制作や工作、展覧会開催を行っている。2001年に遺贈された私設の美術館が市立館となって学校との連携が重視され、第一期の「子どもスタッフ」が学芸員になる等、美術に出会う場として地域に根付いている。大牟田市動物園（福岡県大牟田市）は広報担当を置いてイベントやライブ配信を展開し、動物福祉のための国際的なネットワークを強化した。地域の博物館が子どもの世界の事物や情報、専門家に触れる窓口として機能する好例であった。

4. 次年度の研究へ向けて

2023年度は、訪問調査の継続と2021年度、2022年度の実態調査の結果をまとめたディレクトリの作成、各協力機関への成果報告冊子の配布や、オンラインを利用したシンポジウムの開催等を目指し、最終的な成果報告へ向けて研究を進めて行く予定である。

◎謝辞

今年度も昨年度同様、多くの教育機関に調査協力をいただきました。ドイツの青少年芸術学校へのアンケート調査では、新型コロナウイルス感染症の影響に加えてロシアの軍事侵攻による世界情勢への多大な影響から、ヨーロッパが新たな課題を抱えざるを得ない状況のなかで、大変丁寧で熱心なご回答をいただきました。日本における視察訪問においては、アンケートの文面からだけでは知り得ない実践の実情を、現地を訪れることによって立体的に理解することができ、大変貴重な機会を得ることができました。ご協力いただいた全ての施設の皆様に、この場を借りて心からお礼を申し上げます。